

悪役令嬢にオネエが転生したけど

何も問題がない件

★ 登場人物紹介 ★

マリアヌス

平民出身の聖女。
エリザベートに淑女としての心構えを
教えられるうちに友人になる。
天真爛漫で素直。

ハミルトン

物販系らかな宰相の息子。
とある事件をきっかけに
エリザベートに信頼を置く。

ジョセフ

画家を志すジェントリー階級の青年。
エリザベートに絵の腕前を
見出される。

ウィリアム・ダーシー

エリザベートに求愛する貴族青年。
陽気で親しみやすいが、
軽薄で大げさ。

ルバート

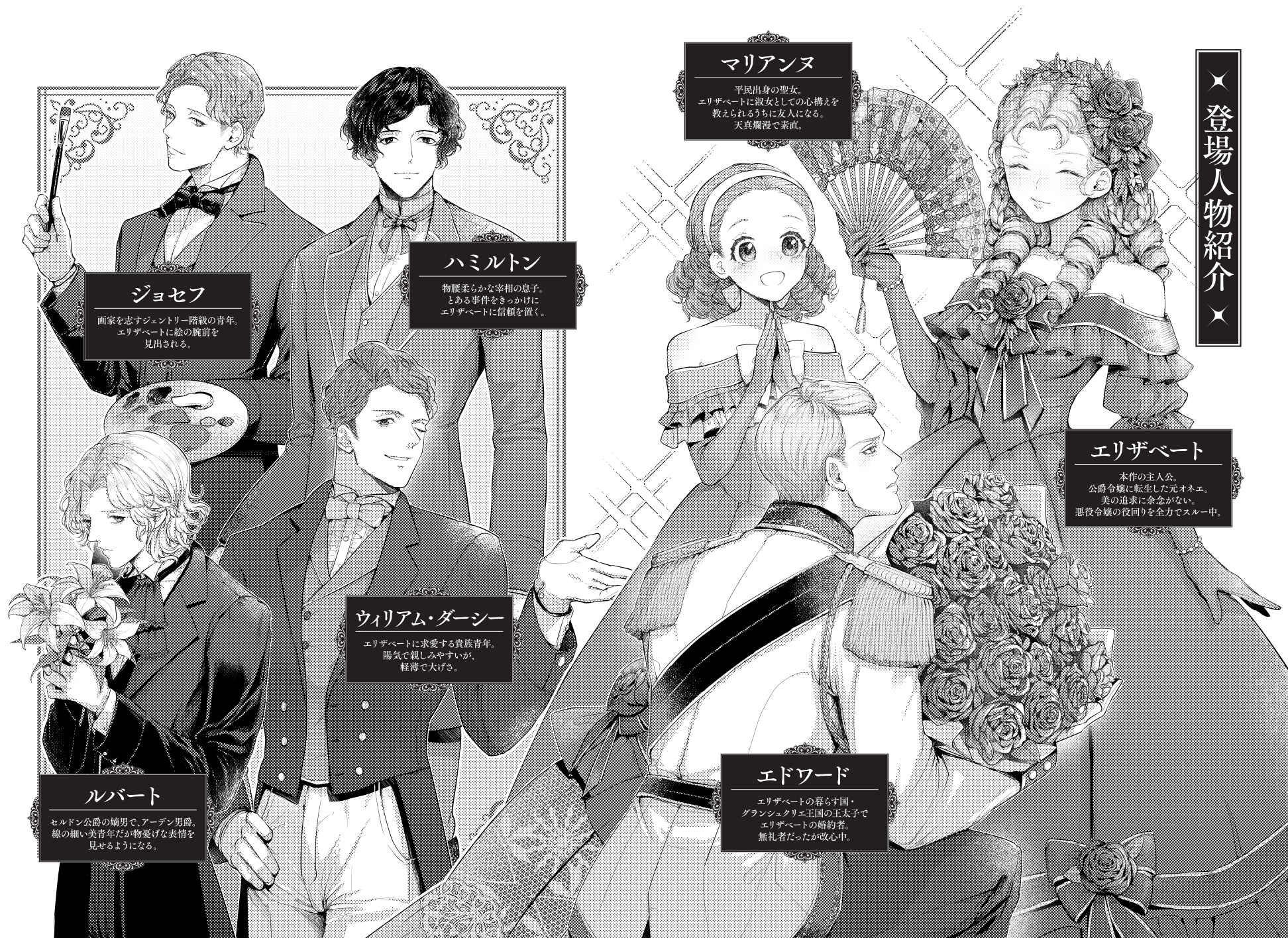
セルドン公爵の嫡男で、アーデン男爵。
線の細い美青年だが物憂げな表情を
見せるようになる。

エリザベート

本作の主人公。
公爵令嬢に転生した元オネエ。
美の追求に余念がない。
悪役令嬢の役回りを全力でスルー中。

エドワード

エリザベートの暮らす国・
グランシュクリエ王国の王太子で
エリザベートの婚約者。
無礼者だったが改心。



人生に二度目があるなんて

「シャンパンは唯一美しく酔える」

ポンパドール侯爵夫人の言葉だっただろうか？

あの女の名言はたいていクソよ。

二丁目でドンペリ、モエドシャンドンを飲みまくった私は美しくどころか醜態を晒しながら、ふらふら歩き、そのままトラックに撥ねられた。

一瞬の出来事だったわ。

言うなればシャンパン死というところかしら。

まあ自業自得よね、自分が悪いんだから仕方ない、後悔なんかないわよ、やりたいように生きてきたんだから。

そう思い、私は意識を手放し天に召される（地獄なんかには落ちないわよ）はずだったのだ。

だから、目が覚めるといふ状況に、非常に困惑しております。

体はさして痛くない、なんか柔道で受身の練習したくらい余韻だわ。私はゆつくりと目を開けた。

「目を覚まされましたぞ！」

洗いおっさんの声にびっくりして、目を見開くと美しい絹地に、細かな花刺繍がされた天蓋が目に入る。

私はベッドの中にいた。それも、旅行雑誌によくあるヨーロッパのホテルのスイートルームでしかお目にかからないようなお姫様ベッド。

薔薇模様の刺繍が施された絹の羽布団が私を包み込んでいる、贅沢極まりないベッドに寝ている状態……

「私に何があつたのでしょうか？」

ん？ 私の声、なんか変じゃない？ 酒焼けしていない、すんだ美しい声……。私はとりあえず事情を知りたくて恐る恐るそばにいた外国人に尋ねた。

聴診器や薬瓶をもっておろおろしている医師らしいその人の顔を見るが、ヨーロッパ人!! 周りにはみんなヨーロッパ人。

やだわ、日本語通じるかしら？ 理由はわからないけど、どこかヨーロッパ系の大使館に運ばれたの？ なら思つたより軽傷だったのかも。

「お嬢様は修道院の帰りに馬車の事故にあわれて、意識がなかつたのですよ」

「まあ、そうなの……ん？ 修道院？ お嬢様？」

いや、今日は髻剃つてないから、どうみてもお嬢様顔ではないはず。それに修道院？ 体を起こ

して顔をあげると視界に自分の髪が現れた。

そう、太陽の光と見間違えるような美しい黄金色の長い巻き髪が……

「……鏡はあるかしら？」

「はい、こちらを」

医師らしき人が手鏡を差し出したので、私は奪い取るようにして手鏡を覗き込んだ。

そこには金色の美しい髪に薔薇色の唇、青と紫の間のような美しい瞳を持つ絶世の美女が映っている。

少なくとも三十三歳の小太り短髪髻オネエではない。

「え！ え!! なんて!!」

「落ち着いてください」

「あなた！ 落ち着けるわけじゃないでしょう！」

いやいや、誰でも小太り髻オネエがブロードの美女になっていたら驚くにきまつてるじゃない。夢なんだろうか？ なんて？ なんて？ なんて？

「お嬢様、失礼致しました。まだ意識を戻されてすぐでしたのに、配慮が足りませんでした。私達は退室致しますので、ゆっくりとお休みください」

そう医師は言ってみんなを促して出て行った。が、状況はつかめない。

なぜか自分が絶世のブロード美女になっていて、プリンセスみたいに扱われているなんて……

「はっ！」

大切なことに気づいて私は布団をめくりあげて確かめる。

「チ○コないじゃん!!!!!!」

見覚えのないものしか見えない……

「一体どういうこと!?!」

私の叫びは虚しく、華やかな部屋の壁に吸収された。

まあ、当たり前だけど、叫んだとどこでも変わらないわけよ。

それから少しして、私はふかふかな布団の中で微睡んでいた。

きつと今は夢の中で、目覚めたら無機質な病院にいるのだろう。誰かが一一九番してくれて、救急搬送されて、私は助かったのね。

けれど、そう思っただけでしばらく寝ていたのに、目覚めても変わらず贅沢な天蓋付きのベッドの中だった。

仕方なく、私はベッドから出て、鏡を見つめる。そこに映るのは誰が見ても美女としか言えない、美貌の十六、十七歳くらいの若い乙女。

「やっぱり肌の美しさが違うわね……」

私は頬をパンパンと叩いてみる。きちんと痛いわ、嫌だわ、馬鹿みたいね。

ドッキリかしらと思っただけで、いくらなんでもいきなりこんなにウエストを細くするなんて無理

だし、知らないうちに整形手術したって、残念ながらこんな顔にはならないわ……

何が起きたのかまったくわからないけど、酔っ払って車に轢かれたら絶世の美女になっているなんて。誰がそんなこと信じられるかしら？ 少なくとも私は信じられないわ。

でも、私が信じようが信じまいが今そうなっている以上は受け入れるしかないわよね。とりあえず私が誰で、どこにいるのか調べないといけないわ。

ベッドサイドテーブルに呼び鈴が置いてあるのに気づいて、私は鳴らしてみた。

チリリンと美しい音色が響く、なんとなくアルプスを思い出してしまうわ……牛とかヤギが来たらどうしようかしら？

「お嬢様、お呼びでしょうか」

ちゃんと召使いが来てくれて良かったわ。

「悪いけどお医者様を呼んでくださるかしら？」

「かしこまりました」

そう言って召使いが下がり、数分もしないうちに医師らしいダンディなおじさまがやってきた。

「先ほどは取り乱して失礼致しました、私はいったい何者なのでしょうか」

「……とても難しい質問ですな、何から話しましょう」

医師はそう言うと、顎髭あごひげを触りながら悩んでいるように見える。

「あなたさまはロートリング公爵家の御長女、マリー・エリザベート・ローズ・アントワネット・ドウ・ロートリング様です」

「え？……何ですって？ マリーエリザベート……長すぎるわ名前が！」

「修道院長との慈善事業についてのご会談に行かれており、こちらへ帰られる道の途中、目の前に突然現れた子供を轢かないように避けたため、馬車が横転することになったのです」

「だから少し頭が痛いのかしら。まあ痛みは大したことないけど記憶がありませんの。それが問題ですわ。とりあえずお聞きしたいのですが、ここは何という国なんでしょう？ フランス？ オーストリア？」

すると医師はキョトンとした顔で私を見つめている。

「フ……ランス？ ……聞いたことがない国ですな」

聞いたことがない？ フランスは他の言語でもフランス。もしくは近い発音じゃないかしら。それなのになんで知らないの？ 馬鹿なのかしら？

「ここはグランシュクリエ王国の首都、パギですよ」

医師は真面目な顔で言い放った。

グランシュクリエなんて知らないわ、響き的にはフランス語だわ、甘そうな名前ね。

「どの辺にある国なのかしら、地図はない？」

すると医師は壁に飾られていた地図を指差した。

見てみるけどなんかよくわからないわ、少なくとも私が知ってるのと違う。

アメリカ大陸もあるし、日本っぽい島国もあるけれど名前が全然違う……。

「わけがわからないわ……」

私がいるのもしかして現実世界ではない架空の世界なんじゃないかしら？

名前や国名はフランス語風だわ、とりあえずフランス語を話してみても、通じたらフランス語通じる国だし、通じなければ今、日本語で話していることから推測して架空の世界にいつてわかるからとりあえず試してみましよう。

「Où est ma chatte? (私の猫はどこですか?)」

フランス語で医師に話しかけてみたけど、ぼかんとした顔で私を見ている。

「……？ ……なんでしょうか？」

「なんでもないわ」

当たり前よね、フランスなんてないんだものフランス語がわかるわけないわ。

イギリスやフランスがない世界だなんて。

つまり、車に轢かれる前の私がいた世界とは違う、漫画や小説、映画なんかの世界なんじゃないかしら？

平たく言って架空の世界。

で、医師の言葉によると私は公爵夫人だか令嬢なのよね。

よくわからないけど神様が与えてくれたチャンスってことよね？ セカンドライフ的な。

しかも、現世より遥かに恵まれてるわ！ 明らかに裕福そうな地位ある公爵家の人間で、かつ、この美貌！

私の魂にまさにふさわしいと思わない？

なら、うだうだ悩むよりもこの素晴らしい状況を楽しむべきよね！

何をどうしたらいいかわからないけど、権力ある公爵家で財産があるとしたら、なんだって思いのままじゃない。

いっそのこと、あらゆるゴリマッチョイケメンを侍らせるハーレムを作ろうかしら！

そうと決まれば、都合が悪いところは事故の後遺症ということにしてやりすごして、お嬢様らしく振る舞えばいいのよ、得意分野じゃないの、だって前の私ったら大学で西洋文化史を教えたんですもん。

「ありがとうございます、お医者様」

「やはり事故の後遺症で混乱なさっているようです。今はゆっくりとおやすみくださいませ」

医師はそう言うと部屋から下がった。

私は呼び鈴を鳴らして侍女達を呼んだ。そして事故の後遺症で記憶が曖昧だということ伝えて、情報収集をする。

例えばこの国には絶対王政が敷かれていることや、美しく聡明な国王と王妃、三人の王子達がいること。

あやふやな多神教が国教だけど、聖職者の権威は強くないみたい。

部屋に置いてあった聖書みたいな本を読んだけど、ギリシャ神話みたいな多神教の話がちらちら書いてあったわ。

そして長い間戦争はなく、比較的安定した社会が続いているようだ。

で。私について改めて侍女達に聞いたら、ロートリング公爵家の令嬢だっというじゃない。

マリー・エリザベート・ローズ・アントワネット・ドウ・ロートリングという長い長い名前の公爵令嬢。

国内でも王家と並ぶ力のある貴族で、それゆえに王子の一人と婚約しているらしい。

まあまあすごい話よね、三十代のおっさんだった私が王子様と婚約なんて考えられる？

「エリザベート、お加減はいかがですか」

そんなふうに考えている時にやってきたのが、まさに私の婚約者。第一王位継承権を持つエドワード王子。

光り輝くようなブロンドにギリシャ彫刻のような彫りの深い美しい顔。

女の子なら喜ぶであろう夢の王子様らしい人物。

ええ、まったくタイプ外。

いや女子ならきつと好きなタイプよ？

でも私はやっぱりもつと男くさい、ガチムチとかゴリマッチョが好きなわけ。

だから鑑賞には良いけど、好きにはならないわね。

「エドワード殿下、このような場所にお忙しい中お越しいただき、ありがとうございます」

王子様が見舞いに来たから、ベッドの上でだけでも、療養中の私もご挨拶をすることになったけど、普通は事前通達を出すわよね？ 王室メンバーがくるなら。

まあ王子様って、なんて不作法なのかしら。

「いや、婚約者を訪ねるのは重要なことですから」

「殿下のお優しい心に感謝致します」

「……………」

「……………」

話すことがなくて、無言の時間が流れる。

いやいや、何を話せというのよ？

見も知らぬ王子様と話したことある？ 私は今、話してるけど。でも話のネタはないわよ、共通の話題なんてあるかしら？ 私の好物のイカの塩辛なんかぜったい食べなさそうだし。

「殿下、差し出がましいことではありませんが、今の私は記憶が曖昧あまいまです。体調こそ改善してはおりませんが、婚約を一度、考え直された方がよろしいかと存じ申し上げます」

王子様には悪いけど婚約破棄しないと。

だって、よくわからない世界で王子の婚約者になるなんてめんどくさいし、素敵なゴリマッチョに出会った時のためにも、泥沼みたいな関係は嫌だわ。

他人がそうなるのをみるのは楽しいんだけど、自分がそんな目に合うのは嫌。

そう、私はこんなふうに分勝手でわがままなの。

そんなことを考えて、ふと王子の顔を見てみたら、王子はさっきまでのお面みたいな作り笑顔ではなく、驚いた顔をして私を見つめていた。

そのまま王子が何にも言わないから、私は念には念をいれて話し出した。

「国外からどなたか良い姫君をもらった方が国益にもなるかと」

「え？ あ？」

そんなキョドる内容？

あーた！ 人の話きいてるのかしら！ と、突っ込みたくなるわ。

普通、王族の結婚は国内よりも他国との結びつきを重要視していたから、国内貴族と結婚するのは結構レアなケースなのよね。

「国は安定していますが、和平を長く保つには周辺国との婚姻による同盟が有効です。国民もそれを知っていますから、強く反対はされませんでしょう」

「君は、私と結婚したくないのか？」

「個人的な感情は不要です。今の私と結婚しても、国にとって利益はありません」

「エリザベート。君、どうしたんだ？ まるで別人と話してるようだ、いつもならドレスや噂話くらいしかしなかつたじゃないか」

「……頭をうってからすっかり考えや気持ちが変わったのです」

「……うか完全に別人なんだけどね。」

「そうか……」

エドワード殿下は少し思案顔になる。

「君の言う通りにしようにも諸外国には適切な姫君がない。ホーランド王国の王女は病弱でこの

国に来ることすら難しいし、フロイセン王国の王女はまだ二歳だ」

「あらまあそうでしたのね、ほかにいませんの？」

「私は君に好かれていると思っていたのだが……」

「私には荷が重いかもしれないと考えるようになったのです。王太子の妻になる器ではないと」

「……私も以前はそう考えていた」

エドワード殿下はそう言う顔をあげて、真面目な顔で見つめてきた。

「しかし今、君と話して、考えが変わった」

「え？」

「政治について話せるとは知らなかった」

「他の方もそうでしょうか？」

私なんてこの世界のこと、今日産まれた赤子並みに何も知らないのよ？ 比喩じゃなくてね？

ほんの少しの会話でそんなふうに思うなんて、この人馬鹿なんじゃないかしら？

「とにかく、婚約は解消しない」

エドワード殿下はそう言うのと、私の手に口づけして去っていった。

思ったよりも平和ボケしてる国なのだろうか？ もっと情報がないと何もわからないじゃない。

(そうかわ！)

思い至って、私は呼び鈴を鳴らした。

「お嬢様、お呼びでしょうか」

侍女が数名、すぐにやってきた。皆さん有能だわ。

「新聞を持ってきてくださる？ 平民から貴族が読むものまで、とにかく全社分」

三十分も経たないうちに国中の新聞が部屋に集められてきた。

真面目な政治新聞から卑猥なエロ新聞までまあ色々ありますこと。

とりあえず、すべて読みましょう……

幸運なことにこの国の文字や言語は日本語。

私の推測が正しいなら、ここは日本で制作された、あるいは翻訳されている小説や漫画、ゲームの世界なのかもしれない。

なぜなら新聞は十五種類もあったけど、その中身は無いに等しかった。

国民は不平もなく暮らし、貴族も政権争いらしいこともせず、文化水準は十九世紀のヨーロッパくらい、科学も同じくらいで止まっている。地図や地球儀もあり、地形もほとんど似ていて日本みたいな島国もあった、私がいるところは現実世界というフランスあたりだ。

そんなわけですべてが作り物の舞台のように不自然だ。

とりあえず状況を整理すると、おとぎ話みたいな平和な世界になぜか転生していて、名前がクソ長い上に、身分が高く、裕福で美女というチート級の公爵令嬢になっている。

世界観がしっかり作られていないことが幸いしてか、政治的な混乱は無に近く、絶対王政が敷かれているが不平は出ていない。

農業、工業、鉱業などバランスのよい国内環境、数年間戦争もなく平和な国。

そして私は、その王家の長男であるエドワード王子という金髪青い目のイケメンと婚約が結ばれている。

とりあえず状況はわかったわ、でもそれだけ。

私は再び呼び鈴を鳴らした。

「お嬢様、お呼びでしょうか」

やってきた侍女は速やかにお辞儀をする。

「お風呂の支度と、化粧品を見直したいから明日にでも商人を呼んでくださらない？　今までの方

じゃなくてもいいから、評判のよい優秀な人にしてね」

「かしこまりました」

「あ、お風呂は水ではなくロバのミルクにしてちょうだい」

「ロ……ロバ!？」

侍女は困惑している。あら、そんなに手に入りにくいのかしら？

「手に入らないなら牛乳でいいわ」

「かしこまりました……。至急ご用意致します」

侍女は慌てて出て行ったようだ。

ヨーロッパの世界なら硬水の可能性が高いから、肌荒れを避けるためにはミルクがよいだろうと思ったのよね。とくにロバのミルクはクレオパトラやポツペア、タリアン夫人などの歴史に名を残す美女達も実践してたから間違いないでしょ。

準備ができるまで、鏡に映る自分をゆっくり見ながらどんなドレスを買うのか考えようと思つていたら、侍女がお風呂の準備が出来たと告げに来た。早いわね。

やはりロバのミルクを使うという概念がいらしく、牛乳を温めたものがバスタブに入っていて、別の容器に身体を洗う用らしいお湯が用意されていた。

服を脱がされてバスタブに浸かり、海綿スポンジと石鹸せっけんで自分で身体を洗った。

シャンプーがないから、髪はお湯で洗うだけ。髪をミルクで洗うのは臭くなりそうだしね。

でも髪を洗うことに関しては改良する必要があるわね。

とりあえず湯浴みをしてさっぱりして、またフリルと造花だらけの、舞踏会にでも行くかのような華やかな部屋着に着替えると、ふと気になって大人が七人くらい入りそうな大きなクローゼットを開けた。

クリノリンというスカートの骨組みになる丸い輪っかが真っ先に見えた。クリノリンスタイルのドレスが流行したのは十九世紀頃のヨーロッパ。やっぱり十九世紀頃がこの世界のモデルなのかしら。

これも設定が甘いせいかな、公爵家のクローゼットなのによくわからない収納をしているせいで、ドレスのデザインが中途半端にしかわからない。けれど、色使いとゴテゴテ度が酷いからすべて作り直させないといけないわね。酷いセンス。

何着か取り出してみると、面白いことに真新しい十八世紀のローブ・ア・ラ・フランセーズやシュミーズドレスなど、明らかに時代が異なるドレスが出てきて苦笑してしまったわ。

やっぱりあまり時代考証していない作品の世界にいるんだわ。

まさかと思い、下着がないか探してみると引き出しに収納されているのを見つけてドロワーズを広げてみた。

ああ、ドロワーズってアンクルパンツみたいなものでパンティがなかったからこれを穿いていたのよ。

「あらま、こんなところは歴史に忠実なのね」

ドロワーズの股のところは縫われておらず開いていた。

どういうことかという、ドレスを着た状態でトイレを済ませることができるようになっているの。

いちいち脱げないでしょ？こういうドレス着ていたら。

これじゃトイレも砂かけトイレかもしれないわ。

そんなことを考えていたら侍女達がやってきて、私はあつというまに侍女達にネグリジエに着替えさせられてベッドの中へ。

そのままぐっすり寝て、朝が来てベッドでまずいオートミールを食べて、ドレスに着替えさせられて髪を結ってもらう。

侍女達は手慣れたもので機械式人形みたいにテキパキ動いている。

どこかにゼンマイがついているんじゃないかしら？

そんなことを考えていると化粧品店の商人がやってきたと知らせが入る。私は部屋に通すように

命令した。

これがまさか騒動の始まりになるなんて、私、この時は少しも思わなかったの。

「あなたが化粧品屋さんね？」

目の前の若い礼儀正しい爽やかな美青年。

アナウンサーにいそなイケメン君は十九世紀よりは少し古い、ルイ十五世時代の服装で現れ、様々な化粧品を詰め込んだ荷物を持ってきていた。

時代考証をまともにしていない作品だね。英語とフランス語名がごちゃ混ぜだったり、いろんな時代の服装が出てきたりと、まあ、あきれてしまうわ。

しかし、ただけないのはその白粉だらけ頬紅だらけのお顔。

素が良いのがわかる分、すぐに洗い流してやりたいところだけど、そんなことしたら大騒ぎになるからしないわ、もっと上品な方法でなんとかしてあげないと。

「はい、ルイ・ファルジと申します」

「ご挨拶ありがとうございます。さあ本題に入りましょう、あなたの商品を見せてくださいな」

様々な商品があるけれど、やはり科学水準が現代と同じではないため、謎なものが多かった。

「これはローズウォーターね？」

「はい、その通りです」

「これはローズマリーとベルガモットとミントか何かを漬けたオイルかしら？」

「その通りです、鼻が良くていらっしやいますね」

「オイルもいけどアルコールに漬けた方がいい気もするわウルソール酸が抽出しやすいはずよ」

「ウルソール酸？」

ルイ・ファルジは白粉が崩れ落ちてきそうな顔で聞き返してきた。

「ローズマリーに含まれる成分よ、肌のハリを出してシワを目立たなくする効果があると言われてるのよ」

「そうなんですか」

「これは何かしら？」

私は獣臭さと花のおいが入り交じったクリーム状のものを指さした。

「これはポマードで薔薇やカーネーション、黄水仙の香りをつけています」

つまりベースは鯨油か熊油ね、道理で違和感がある匂いなわけだわ。

はつきりいつてあまり期待できるものはないけど収穫があったわ。

今の会話からハーブや花はこの世界でも同じものだとわかった。

少しだけ安心したわ、植物の名前が同じなら苦労することは減りそう。

問題は私が使う化粧品と、この坊やの化粧よね……

「残念ながら納得がいくのはシンプルなローズウォーターくらいしかないわね……」

「えっ！」

イケメン君は呆気にとられたような顔をする。

「例えばあなたが塗りたくっているこの白粉は鉛白えんぱくよね？」

「はい」

「有毒で肌にダメージを与えるだけじゃなく、死ぬ可能性があるのもご存知なのかしら？」

「そんな……」

「知らなかったのね」

「……はい」

可哀想にうなだれて、雨に濡れた子犬みたいだわ。いえ、化粧のせいで今はちゃぶ台から転げ落ちた粉まみれの犬福いぬふくってどこかしら。

このままにしておく、さすがに可哀想ね。

「あなた、私が今から言うものを持ってきてくれないかしら？」

私の知識ではセラミドとかは作り出せないけれど、アロマセラピー的な手作りコスメならなんとかわかる。頭にあつたレシピア素材を話して、作ってもらうことにしたの。

ルイ・ファルジはすぐに集めると言い立ち去って二時間もしないうちに材料や道具を持って戻ってきた。

私達は階下にあるキッチンそばの空き部屋で行うことにした。

良識があれば階下に令嬢がいくなんてありえないけど、水や火を使うから仕方ないわ。厨房に入らないだけましでしょう。

うれしい発見もあって、氷があるのよ。近くの山から持ってくるらしいわ。

その氷をつかった冷蔵庫みたいなものであるの。

でも飲み物を冷やしたり貯蔵はするのにアイスクリームがないのよ。信じられないわ。今度作ってみようかしら。

まあ、そんなわけでみんながバタバタしながら準備完了。

私？ 指示するだけよ、公爵令嬢ですから。

「そうね、最初は簡単なものから作っていきましよう」

私は百合の花のおしべとめしべをプチプチ引きちぎると煮沸消毒した大きめの蓋付きガラス瓶に入れていく、満杯になったら間を埋めるようにアーモンドオイルを注いでいく。

「これは何を？」

ルイ・ファルジは不思議そうな顔で見ている、化粧を落としてきたその顔はともかっこのかわい顔だったが鉛白えんぱくのせいか荒れているようだ。

「百合のオイルを作っているの。荒れた肌がいいと言われているのよ。時間がかかるからこれは三週間後に濾こして使いなさいね。それまでは何もしてないオーリーブオイルかアーモンドオイルをつけておきなさい」

「はい」

ルイ・ファルジはインク壺をひっくり返さないように注意し、メモをとりながら笑顔でうなずいた。

「次はフェイスクリームね」

私は微笑みながらローズウォーター、アーモンドオイル、ミツロウ、スミレの精油を並べた。ミツロウを湯煎して溶かして、アーモンドオイルとローズウォーターを入れてよく攪拌する。完全に冷める前にスミレの精油を加えたらできあがり。

「ほら、完璧じゃないかしら？」

私は丁寧にクリームを陶器の容器に移しながら微笑んだ。

自分の手の甲に塗ってみたけど、べたつきはなく、いい感じに保湿してくれる。なによりスミレの香りが上品でいいわね。

「化粧水は蒸留器を使いたいけども持ってこれないわよね、大きいから。だから今は鍋で作るか、覚えて帰ってちょうだい」

私はそう言うのと鍋と蓋を持ってきて並べられた材料の中から花々を選んだ。

「白百合は少しにして、メインは薔薇にしましょう」

鍋の真ん中に小さな木の板を入れてその上に陶器の容器を置いた。

その周りを埋め尽くすように花々を入れていき、水を少し加える。

そうしたら鍋の蓋を逆さまにして上に氷をのせると、暖炉の火にかけていく。

「良い香りがしてきたわね」

私は鍋の様子を見ながらルイ・ファルジに話しかけた。

「……は……い……」

ルイ・ファルジは返事をしながら今にも死にそうなほど苦労している様子で、真珠の粒を砕いて挽いて粉にしている。

「私のは真珠だけを使つてね。そのほかの人達にはよく焼いた焦げていない貝の殻を細かく粉にしたものとかで代用してもいいと思うわ。米を粉にして使うのも安全だから上手く組み合わせるみて」

返事は期待できなさそうなので私は鍋を眺めながら終わるのを待った。

「さあどうかしら？」

一時間くらいして、鍋を開けると陶器の容器にお水が溜まっていた。

これがフラワーウォーター、化粧水だ。

「完成ですか？」

「いいえ、最後のひとさじよ」

私はそう言うのと蜂蜜を小さじ一ほど加えて攪拌した。

「蜂蜜には保水効果があるから肌にも良いのよ」

そうして私は完成した化粧水を瓶に詰め替えて、ルイ・ファルジの質問に答えながらレシピや改良案を伝える。すべてを終えると後日また持つてくるように言い、帰した。

私は部屋に戻るとクローゼットから少しはマシなドレスを六着出すと、侍女達を呼んだ。

なにか怒られるのかとみんなビクビクした面持ちで頭を下げている。

やだわ、私がいじめっ子みたいじゃないの、悪役令嬢でもないのに。

「新しいドレスを作るにも時間がかかるでしょ？ だから、このドレスのいらぬ飾りを取ってしまいたいよ、そしたら少しは品がよくなると思うの」

私はドレスについている悪趣味な造花を扇でさして言った。

侍女達は、え、そんなこと？ って言いたそうなくらい拍子抜けした顔を見ると、すぐさま手直し作業に入った。

これで新しいドレスが出来るまでは、なんとかなるかしらね。

実際、飾りを取るだけなので一時間もしないうちに終わってしまった。

「服の商人はまだかしら？」

「ベルタン嬢でしたら、まもなくいらつしやいます」

侍女の一人が元氣よくそう言うので思わず笑ってしまった。

「元氣が良いのはいいことよ、ついならすぐに通してくださる？」

ドレスもまともなデザインで作らせないと外へ出て歩けないわ。

私は手直しが終わった中でも一番上品な藤色のドレスに着替えさせてもらった。

鏡に映る姿を見て私はほっとした。

下品なりボンや薔薇ばらの造花を取り払って、フリルだけになったドレスはシンプルだからこそ私の華やかな美貌にマッチしている。

「とてもお美しくいらつしやいますわ」

侍女の一人は呆然としてそう言うと、固まったように動かなくなった。

「あなた、大丈夫？」

「はっ！ 申し訳ございません、あまりの美しさに気を失っておりました」

侍女の発言に私は満足して優しく微笑んだ。

ドアを叩く音がしてどうぞと促すと、「ベルタン嬢が到着しました」という声でしたので部屋に通すように言いつけた。

「お初にお目にかかります、ローヌ・ベルタンと申します」

現れたベルタン嬢はけして造形が美しい人ではなかったけれども、自分をよく知っている人に見受けられる魅力がファッションで表現されている。

「来てくださってうれしいわ。あなたは腕が良いと聞いています。とりあえずあなたの能力を測るのにデイドレスと夜会用のドレスの二着をお願いするわ」

ベルタン嬢は静かに私の言葉を聞いて、ゆっくりと顔を上げた。

「かしこまりました。実はいくつかデザインを用意してきましたので、生地見本帳と合わせて見ていただければと思います」

そう言うと、大きなスケッチブックと生地見本帳を取り出して広げてみせた。

確かに奇をてらうようなデザインではないけれど、上品で優雅なものが多い。

「ベルタン嬢、このドレスはデザインは素敵だけど色合いがよくないわね。そうね、こういう茶色の生地にした方がいんじゃないかしら」

「お嬢様、名案ですが、この色合いは華やかさに欠けるので、若い娘さん方はあまり身につけま

せん」

ベルタン嬢はとんでもないというように私を説得しようとしている。

「だからこそよ。私の華やかな顔で華やかなドレスにしたらびつくり箱をひっくり返してみたにうるさくて、くどくなるに決まってるわ。だから日常の服はシンプルでいいのよ。さあ他にも見せてね」

私はそう微笑むと、デザインと生地を決めて注文した。

さて、翌日にはファルジがやってきて、頼んだ美容クリームやおしろいなどの化粧品を仕上げてきた。仕事が出る男は違うわね。

今日はロイヤルブルーのデイドレスにレースの付け襟をしてカメオのブローチをつけただけのシンプルな服装にしたのだけど、私のブロンドに似合うようでファルジはうっとり私を眺めている。

誰かにここまで見惚れられるのは前世にはなかった幸福ね。

もちろんここに来る前の、ひげ面おっさんだった時にも、モテてはいたけどここまではいかなかったなあ。

恋する乙女のようにぼーっと私を見つめていたファルジもさすがに不躰だと気づいたようで、失礼を謝り、品物を次々と出していった。

「いかがでしょうか？」

「よく出来るわ。蜜蝋みつろうの量がちょうど良くてテクスチャーもとてもなめらかだし、ローズウォーターにアーモンドオイルだからしっかりと保湿もできていい感じよ」

「良かったです」

「パウダーもいい感じだわ。真珠を砕いて、粉をここまで細かくするのは大変でしたでしょう。ありがとう」

「いえ、お嬢様のためですから」

「そうだわ、あなた、これを自分で他の人にも高い値段で売ったらいいのよ」

私はそう言いながら、出来上がった素晴らしいスキンケア商品を眺めて微笑んだ。スキンケアが上手くいったのだから次は……

「あっ、次は髪の毛用の石鹼せっけんと洗髪後に使うリンスのレシピを言うから、作ってきてくださるかしら？」

できるだけ魅力的な表情でファルジを見つめると、白粉のないファルジの頬が赤くなるのが見えてくれた。

「はいー」

化粧品開発に成功したファルジは信奉者しんぽうしゃの目をしていて。

「まずは石鹼せっけんの作り方は変わらないのだけど、ローズマリーオイルをベースにしてください？アーモンドオイルに漬け込んだやつね。リンスは白ワインの酢すに薔薇ばらの香料をたくさん入れてちょうだい。それをローズウォーターで少し薄めて石鹼せっけんで洗ったあと流すように使うとキシキシしなくなるのよ」

「やってみます！ あの……お教えいただいた製品をお嬢様のお名前で販売させていただきますだけでもよ

ろしいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

私は特に深く考えずに承諾して貴婦人らしく微笑むとファルジを退室させた。

それから数日後にはシャンプーと酢リンスも届いて洗髪してみた。

まずは侍女達が私の結び上げていた髪をほどいて広げていき、生温かいローズウォーターで丁寧にすすぎ洗いをしていく。ああ、水を使わないのは、このあたりの水は硬水なのよ、髪には良くないのよね。結構飲みにくくて、飲んだ瞬間にわかつたわ。そしてローズウォーターで泡立てたシャンプー石鹸を髪や地肌につけて洗っていく。よく泡立ち、綺麗に洗ってるわね。そしてすすいたら、酢をつかったリンスをしていくようになるかしら？ 知識として知ってたけど、試したことないのよね。

たくさん薔薇の香料を入れてくれたからか、薔薇の良い香りが漂っている。

軽くすすいで、タオルドライしてよく乾くまで扇いでもらう。

酢の感じは消え去って優しい薔薇の香りだけが残っている。

「まあ！ お嬢様、素晴らしいですわ。もともと美しい髪をお持ちでしたけど、まるで黄金のような美しい輝きですわ」

「ええ、本当ににそうですわ、太陽の光と見まごうような美しさ」

侍女達の褒め言葉を聞いて私は微笑まないようにして言った。

「私ときたらまるで髪の奴隷ね。でもキシキシしないわ、素晴らしい出来よ」
美人も楽じゃない。

「お嬢様……」

「なあに、エマ？」

シャンプーやリンスの開発も成功し、しばらく経ったある日、部屋でくつろいでいると私の第一侍女のエマが声をかけてきた。

「頭を打たれてから別人のようにおなりだと噂になっております、何かまた具合も……」

やはり身近な人には異様にうつるのだろう。

「エマ……実は頭を打った際に神から啓示をうけたのです」

「神から啓示!？」

「お前の命はやり残した使命があるゆえ戻そう、しかし、再度与えた命を無駄にせず生きるようにと神が話されたのです」

できる限りドラマチックに言うように心がける。

「エマ、私は神により生まれ変わったのですよ」

「お嬢様！」

あちら、エマが感動しているわ。

案外、ドラマチックなお好きなのね、もっとお堅い性格なのかと思っていたわ。

「今のお嬢様であれば申し上げても良いかと思いますが、実はお嬢様の悪名高さは国中に広まっております。ですが、最近の振る舞いにより印象が変わってきているようです」

「悪名？」

「様々な悪意を撒き散らし、悪の支配者と呼ばれていたお嬢様が美の女神になられたと」

「いやいや、エリザベートあんただんだけ性格悪い振る舞いしてたのよ？」

「私、別に何もしてないのだけど……？ 待って、悪意を撒き散らす……？」

「この世界の元ネタは未だにわからないけれど、それって悪役令嬢じゃない？」

嫌だわ、私はヒロインの器よ！

「エリザベート様が開発された化粧品は素晴らしい発明と大絶賛で、皆、エリザベート様を美の女神と崇めております。特に白粉は、肌を傷めない」と

そう。十九世紀末まで鉛入りの白粉はヨーロッパで使われており、鉛ゆえに肌が荒れてボロボロになっていたという。だから私は米粉やタルクを組み合わせたものを作らせて流通させた。

私は真珠の粉を加えた特注品だけど、原価を下げるためにも他の人には牡蠣の殻の内側の、白い部分だけを混ぜたものでも充分。

まあ、安全な白粉や化粧品が広まるなら悪くないし、名誉も回復傾向にあるみたいだから、どんどんやっていきましよう。

『エリザベート公爵令嬢の白粉』

『エリザベート公爵令嬢の薔薇水』

『エリザベート公爵令嬢のスキンケア』

そんな名前で売り出した化粧品は爆発的な人気を博し、発売から一週間後には公証人や何やらの色々な人がいる中で、ブランドの立ち上げ人として調印をすることになってしまったのよ。ヤバくない？

実は、私が伝えた化粧品が瞬く間に大ヒットした直後、ルイ・ファルジがお店を譲渡したいと言い出したの。

もうそれは熱心に、まるでプロポーズでも始めるんじゃないかと思ってたわよ。

なんて言ったかわかる？

「私はその美しいお姿を拜見するためだけに生まれてきたようなものです、どうか私と共に受け取ってください」

もちろんそれは丁重にお断りしたのだけど、向こうもけっして譲らず、ということもあり、実際の経営についてはルイ・ファルジに一任して、収益分を相当な割合いただくことに。今後も考案したりした際には別途考案料などをもらうなど、めんどくさい取り決めを行うこととなったの。

貴族が商売するなんて、と思いつつ、元の世界の歴史を見ても何があるかわからないから、お金はたくさんあってもいいわね。そう思い直して承諾することにした。

「また、面白いことを始めたね」

調印をした後、テラスでお茶をしていたら、どこからかエドワード王子が現れた。

「これはこれは、エドワード殿下におかれましてはご機嫌麗しゅううらわ」

「君の化粧品は素晴らしいって、巷で話題だよ」

「まあ、そうですね？ 殿下、『会話の手助け』に冷たくなさらないでくださいまし。このように腕を広げて殿下を待ち受けておりますわ」

殿下はポカンとした顔で立ち尽くしている。

「椅子におかけになって、ということですか」

モリエールの劇を観たことないのかしら？

そう思ったけど、ここが本当のヨーロッパじゃないなら、モリエールなんていないんだわ。

「椅子が『会話の手助け』か……面白いな」

エドワード王子はそう言いながら腰掛けた。

「退屈ですと言葉を言い換えたりして暇つぶしをしていますのよ」

「まるで詩人のようだ」

「そんなことありませんわ、むしろ商人のようだと思いますのでは？」

「確かに銀行家や輸入業は貴族にもいたが、化粧品となると耳にしないから……一部では、醜さを上手く隠すなんて、悪女らしい悪巧みだと言うやつもいたが。そういう輩は馬鹿なのだろう」

「まあ！ 酷い話ですわね、第一、あれらは醜さを隠して騙すような化粧品ではありません。肌を清潔にし、衛生を保つ薬です。たまたま美しくなるだけですわ」

「まあまあ、私がきちんと医薬品だと広めておくよ。実際、領地の上がりだけでなく別の資金源があるのは、貴族にとって良いことだろう」

「まあ、意外ですわ殿下。貴族らしくないと誇り高い王子様は仰りそうですのに、先見の明がある頭脳をされてますのね。ただ、貴族に力を付けさせすぎても王政には良くないことをお忘れなく。そういえば、この国の農業は今どこそ安定していますが、生産量が増えるには領地が増えなければ難しいのではないかしら？ 新しい栽培方法や品種改良がなされない限りは、生産量増加も期待できませんし。それに将来、天災が起これないとは言えません」

「……ああ」

「それより、何かご用事がおありになったのでは？」

考え込んでいた様子のエドワード王子は、ハツとした様子で話し始めた。

「セントマリー村に聖女が現れたそうだ」

「聖女？」

王子が頷く。

「今調査に入っているが、マリアンヌ・ラモーという娘が聖なる力を發揮して癒しの泉を掘り起こしたそうだ」

「まあ、すごいですね」

聖女なんておとぎ話の中にかいたかと思ってた。いや、ここは作り物の世界なんだけれど。

「ああ、自らの手で掘っていたようだ」

まるでフランスのルルドの聖母とベルナデッタの話みたいだわ。

でも結構ガッツがあるわね、創作の世界の聖女のイメージとは大分違うわ。

私なら真似したくないわね、泥だらけなんて泥エステだけで充分よ？」

「なんか別の意味ですごそうですね、強そうだわ」

「聖女の出現は少し厄介なことになりそうだ」

「なぜですか？」

「君も知ってる通り、聖女は王家と並ぶ権力を持つことになる」

いや、知らないわよ。殿下ったら、私の記憶が回復してないことを忘れてるのね？」

ますます婚約なんて破棄したいわ。

「あら、そんなにも権力を持ってしまえばなら聖女様と殿下が結婚なさって、王家に取り込めばよろしいのでは？」

「なっ！」

「わたくしはいつでも婚約解消に応じますわ。理由は聖女様との結婚で良いではありませんか。それが難しいなら、わたくしに健康上の理由で問題があるなどとしていただいても結構ですわよ？」

「……………」

エドワード王子は哑然とした様子で私を見つめていた。

「とにかく私達がどうこうという話ではなく、政治的なお話ですから王家や国の利になる方を選びますわ」

「…………それは嫌だ」

「嫌だって…………子供じゃあるまいし」

「別に身分や役割で結婚できるほど私も出来た人間じゃないんだよ、帰る！」

そう言い捨てて、エドワード王子は不機嫌そうに帰っていった。

あんな感情に振り回される君主なんて国民がお気の毒だわ。

私はそう思いながら、クッキーをバリバリ食べた。



翌朝の新聞は想像通りの見出しが躍っていた。

『聖女の降臨』

『聖女の訪れを伝える大天使』

十五紙すべての新聞はこの話題で持ちきり。

空前の聖女ブームね。聖女なんて、現れるのは聖書の中だけかと思っていただけよ。そういえば前世のスマホの広告にも聖女が出てくる漫画があったわね。

もし、現れた聖女がこの世界の主役なのだとしたら、この世界のメインストーリーは始まっている

るわけよね……

となると私は何かの役どころがあるわけよね……。ありえそうなのは……

その一、美しさのあまりドラゴンに攫さらわれて、勇者、王子、聖女に救われるのを待つ乙女。

その二、ヒロインをいじめる悪役令嬢。

その三、本筋と関係ない貴婦人。

その四、ヒロインを支える友人。

前にも思ったけれど、エマに聞いたエリザベートの悪評からいって、ありえそうなのは二番目の悪役令嬢なのよね。

『悪意を撒き散らす令嬢』なんて話していたし。

けれど私は悪意なんか撒き散らさないし、聖女がヒロインなら邪魔はしないわよ？ 興味があるのは美についてだけ。

聞わない訳にもいかないだろうけれど、仲良く楽しく穏やかに行きましようよ。

お医者様がいらして診察をしてくださったけれど、顔色を見ただけ。何がわかるのかしら。

けれど、今日からベッドから起き上がって、歩いたりしていいとお許しが出た。

その前からあれこれと動きまくっていたし、問題ないとわかっていたけれども。

というわけで、公式にきちんとしたドレスに着替えることになったわ。

外の世界にお出かけもできちゃうわけね、楽しみだわ。

憧れの、素敵なドレス。

「このドレスにするわ」

私は考えあぐねた末に、淡い薔薇色の小花が美しい白地の絹のドレスにした。

襟は本当に細かなレースで妖精が作ったみたいに美しいもの、実際は修道女が長い月日をかけて作ったらしいわ、そしてフリルが品良くスカート部分についていて、胴着にはリボンがついて可愛い霧囲気を醸し出している。

このシルクはとでもしっかりした生地なのに、手にすると軽くて月の光のようにつややかで、うっとりしてしまうわ。

しっかりとあつらえたから似合うに決まっているけれど、少し緊張するわね。

始めにコルセットをつけたけど、映画みたいにキュウキュウ締めないから姿勢が伸びたくらいで、そんなに悪くなかった。

その上に巨大な鳥籠みたいなクリノリンをつけて、フリルがたっぷりついたスカートを身につける。最後に、胴着というのかしら？ 上半身の部分を着たら完成。一人では着られないわね。

新調した服だから下品じゃなくて、今の私の顔に見合った美しいものに仕上がっているわ。

私は優雅に歩いて回転してみると、途端に転んだ。

何よこれ。結構重いし、油断しているとスカートに重心奪われるわ。やばい。

「お嬢様、大丈夫ですか」



「え、ええ、調子に乗りすぎただけよ」

そう言って起き上がり、優雅に椅子に座ったけれど、クリノリンのせいね、微妙に座り心地が悪い。

そのうち慣れるわよね、きつと。

新調したのは舞踏会用ドレス、晩餐会用ドレス、茶会服、日常用の晩餐服、日常用の午前服、外出用の寝衣を全部五着くらいずつ作ってしまったわ。これでも貴族の身だしなみとしては最低限。あまりにも悪趣味だったから耐えられなかったし、侍女達どころか父と母も面白い趣味とは思っていなかったみたいで、いくらでも作るようにと資金を出してくださったようよ。

私自身も儲けているはずなんだけどお金って見たことないわ。いつのまにか支払いが済んでるといふ状態よ。

これが裕福な貴婦人なのね。

「エマ、小腹がすいたからお茶とお菓子をお願い」

「かしこまりました」

私は『事故の後遺症を患う体調が思わしくない令嬢』だから、病人食みたいなオートミールやらよくわからない肉をグズグズになるまで煮込んだものやら、蜂蜜漬けのトーストって言った方が良いでしょうなものばかり食べさせられてるのよ。

ありがたいけど、さして美味しくはないのよね。全部、スパイスのシナモンやクローブがやたらに入ってるし。食がすすまなくてお腹が空くのよね。

しばらくして目の前に並べられていくお茶とお菓子。それを見て私は小首を傾げた。

「全部焼き菓子？」

硬そうなクッキー、かろうじてレーズンが入っているようなパサパサのスポンジケーキにアップルタルト。洋梨を赤ワインで煮たやつがある他は全部クッキーのバリエーションみたいな感じ……考えてみたら今までだって、甘いものといったら茶色の焼き菓子しか食べてなかったわね。

「エマ、生クリームを使ったものはないかしら？」

「生クリームですか？ 苺いちじくにかけて食べたりはしますが、お菓子には使わないですね……。日持ちしませんし」

これはゆゆしき事態だわ。

いわゆるケーキってパウンドケーキの仲間じゃないってこと？

嫌だわ、よく泡立てた生クリームのケーキがないなんて、ありえないわよ。

「エマ、パティシエに会いたいからキッチンに行きましょう」

私はエマを伴いパティシエに面会した。

キッチンは大聖堂かと思うほど天井が高く、様々な鍋や調理器具やレンジがあった。レンジといても電子レンジではない。このくらいの時代だと、オーブンを含めた加熱調理器具をレンジと呼ぶの。

ビクビクしている感じのよい青年はカレームというパティシエらしい。

私に怒られるのではないかと思っているのが、怯おびえた顔から読み取れた。

「怖がらなくていいのよカレーム」

私は優雅に微笑みながら、安心させるようにカレームに言った。

「あなたの作るお菓子には何も問題はないわ。私、生クリームを探しにきたのよ」

「生クリームですか？」

カレームは一旦は安心した様子だったが、すぐに訝いぶかしげな顔をした。

「そうよ」

「ありますけど。こちらがどうかしましたか？」

「お菓子作りには使わないのかしらと思って」

「コーヒーや紅茶用、あとは煮込みに使うとか果物やケーキにそのままかける以外は使いませんね」

やっぱりそうなのね、泡立てるといふ考えがないんだわ。

そうならば私の快適なスイーツライフのために教えなきゃいけないわね。

「じゃあさっそくお菓子作りに利用しなくちゃね。生クリームと砂糖、氷水を持ってきてくださる？」

「はー」

私の突然のお願いに対しても、カレームは急いで準備に取り掛かってくれた。数分もしないうちにキッチンの作業台に並べられた食材を見下ろす。

「えっと、生クリーム、氷水は問題ないわね。でも……これは何？ 石？」

「砂糖です」

……こんな天然石みたいなのが砂糖？

並べられた砂糖は、小石くらいの大ききで、前世でいう氷砂糖のような結晶がごろごろしていた。「そうしたら細くなるまで砕いてくださる？」

「かしこまりました」

カレームはハンマーで砕いてより細かくするとスパイスに使っているのだろう、乳鉢と乳棒を取り出して、一生懸命すりつぶし始めた。

「砂糖はカレームに任せて、生クリームを作りましょう。泡立て器はある？」

「泡立て器？」

「ものを混ぜる時に使う道具よ、ヘラとか柄杓ひしやじゃなくて」

「ないです」

そうなのね……。泡立て器がないとホイップクリームがない世界になってしま……。というか、今そうなんじゃないの。ないなら作るしかないじゃない。どうしようかしら。

「エマ、庭の柳の木から枝を数本もらってきてくれるかしら」

「はい、かしこまりました」

泡立て器がないなら作るしかないわ。私はエマに柳の枝を取ってこさせるとちょうど良い長さに切ってもらい、大きめのフォークの先端に裂いた小枝を結び、反対側をフォークの付け根部分に結びつけて上手いことなんちゃって泡立て器を作り出した。

私はエマに生クリームをかき混ぜるよう指示して泡立てさせた、時間はかかるもののきちんと泡立つようだ。

「使いづらいけど、きちんと泡立つわね」

「お…お砂糖……細かく……く……砕きました……」

疲れ果てているカレームは、砕いた砂糖を皿に入れて側に置いてくれた。

「ありがとう、お疲れ様でした。さて砂糖を少しずつ加えていきましょう」

私はエマから泡立て器を取り、手早く混ぜていく。するとすぐに、クリームがフワフワの雲のようになっっていくのがわかった。

「すっ、すごい！ 泡立てるとは、こういうことなのですね？」

カレームは大変感動した様子で出来上がったホイップクリームを眺めている。

カシヤカシヤとさわやかな音が厨房にこだまして他のキッチンスタッフも気になるのか遠巻きにチラチラと見ている。

「カレーム、スポンジケーキあるかしら？ おやつに出してくれた」

「これですか？」

ボソボソだった丸いスポンジケーキを持ってきてくれる。

「あとジャムがあればちょうだい。なんでもいいの」

「苺いちじのものがここにありますよ」

「ありがとう。そうしたらこのスポンジケーキを横半分にナイフで……こうやって……半分にする

のよ」

私は半分に切ったケーキを二人に見せながら言った。

「そうしたらね、ジャムを満遍なく塗りたくって、ふんわりクリームをのせてサンドするわけ」
「美味しそうですね！」

クリームが目をキラキラさせて言った。

「でしょ？ でそこにさらにホイップクリームを塗りたくるわけ」

「おお！ 白いケーキ！」

「ほら、これだけでもだいぶ違うでしょう？ 生のフルーツを飾ってもいいし、さあ食べてみましょう」

私は人数分切り分けて遠慮する二人を促して食べ始めた。

「ん、美味しいわ。生クリームの質も高いわね」

「お嬢様のおっしゃる通り、生クリームの風味がとても良いです。香ばしいケーキに合いますね」
「食べる分だけをその場で泡立てたら、日持ちするかどうかは関係なくなるか……」

カレームはそう言うと、少し考え事をするようにケーキを見つめた。

「お嬢様、カレームが言うように生クリームはすぐに食べるには良いですが、少し時間が経つと崩れてしまうのでは？」

エマがフォークの先でクリームをすくう。

八分立てにしたのにもう緩くなってフォークから四月の雪のようにこぼれ落ちていく。

「確かにね。でもそういう時はあれよ。あれ、あれ……あつ、バタークリームを作ればいいのよ」
「バタークリーム？」

「ええ、メレンゲはわかるわよね？ あ、でも泡立て器がないから、ないかしら」

「いえ、あります、フォークで泡立てています」

思わず、え？ って言うところだったわ、フォークだなんてかなりの重労働じゃない。でもいまはそんなこと言ってる場合じゃないわね。

「メレンゲと白くなるまでよく混ぜたバターを合わせたクリームのことよ」

「メレンゲとバターを……」

「あつ、普通のメレンゲじゃないのよ、確か、そう、砂糖をお湯に溶かして高温のシロップにして、何回かに分けて卵白に混ぜていくのよ」

「試してみよう！」

好奇心で目を輝かせたカレームは、そう言うとシロップを手早く作りだした。それからメレンゲをしつかり泡立てる。そのままシロップを細く垂らしながら入れて、ツヤツヤなメレンゲを作り上げた。仕上げにできたメレンゲを練ったバターに三回くらいに分けて混ぜ込むと

「出来たわね」

私は完成した、美しい艶を放つバタークリームを見つめた。

完璧ね、パリのパティシエが作るケーキ以上じゃないかしら。

「これだと形崩れしにくいから、いいんじゃないかしら？」

「素晴らしいですね、さすがはお嬢様です」

エマは手放して褒め称えてくれる。恥ずかしいわ。もっと褒めなさいな。

「お嬢様、どうか俺を弟子にしてください！」

カレームは急に頭を下げて私にそう言った。

その様子にキッチンが騒然となった。

いや、技術もないから無理よ。第一せつかくお嬢様になったんだから、ずっと台所にいたくないわ。

「カレーム、あなたは立派なプロフェッショナルよ。それに、私はただ技術を伝えただけ。あなたがしなくちゃいけないのは弟子になることじゃなく、プロとして誇りを持ち、そしてさらに学んだり、挑戦をすることじゃないのかしら？ 人から教わるだけじゃなく、自分自身で挑戦して新しい発見をすることが大事なんじゃないかと私は思うわよ」

私がそう言うと、カレームは感極まった様子で拳を握りしめた。

「お嬢様……ありがとうございます……」

「あなたは素晴らしいパティシエよ。もちろん、私も色々なアイデアがあるから形にするためにこれからもお願いすると思います。期待してますわ」

その後は、さらにメレンゲとバタークリームを使ったマカロンパリジャンをはじめ、色々なレシピを教えて一日は過ぎていった。

聖女はつらいよ

それから数日後の爽やかな朝、私は体調不良というベッドでご飯をいただく特権を使い、食べながら微睡んでいた。

エレガントな薔薇の彫り模様があるベッドテーブルには、温かいスクランブルエッグにトリュフをかけたものにバター付きパン、マーマレード、ソーセージにベーコン、焼いたトマト、紅茶とミルクが載っている。

カーテンが開けられており、やさしい日の光が部屋の雰囲気をおしゃれなものにしていた。

そうそう、この時代は未婚女性は朝食室でビュッフェ形式の朝ご飯をとっていたのよね。

「お嬢様、エドワード殿下がお見えます」

そこへエマがやってきて、慌てたような声色で殿下の来訪を私に告げた。

エマったら焦っていても顔は無表情なのよね、ウケるわ。

「まあ……グランサロンにお通しして」

「既にお通ししております」

「仕事が出る女はいい女よ。ありがとう、では身支度を」

「かしこまりました」